

## 『アラビアンナイト』と日本におけるイスラーム認識

松本 ますみ

### はじめに

イスラームはごく一般的な日本人にとってなじみのない宗教の筆頭に挙げられるだろう。しかし、イラン革命、冷戦終結、湾岸戦争、そして9.11以降、米軍のアフガニスタン侵攻、イラク戦争と、イスラームに関する報道は飛躍的に増えた。シーア派、スンニ派、ジハード、原理主義者、イスラーム聖職者、テロリストといった言葉が十分な解説、定義、内容の理解もないまま垂れ流され、消費されている。

また、一部ではあるが、日本独自の現象として「回教」という名称も散見される。比較的新しいところでは、山主敏子訳バートン版『アラビアンナイト』（ぎょうせい、1990年、小学校5-6年生向け）で使われている。ムスリムが一定勢力をもつ中国では、1949年の中華人民共和国成立以来、イスラーム（伊斯蘭）を使い、「回教」はまず使わない。台湾においても同様である。日本のムスリムも自らの宗教をイスラームという。すなわち、「回教」という言葉を使っているのは非ムスリムの、イスラームに対して無知な日本人だけということになる。西欧社会で戦前までよく使われていた「マホメット教」Mohammedanismに通じる、特にムスリムに対して使うのは失礼な言葉が「回教」である。

このイスラームに対するなじみのなさは、もちろん、近代になるまで日本にほとんどムスリムがいなかったという世界史上例外的な歴史によるものであるが、しかし、この十数年の国際化に従ってムスリム人口が増えて、定住外国人や日本人改宗者も含めて10万人という統計もある<sup>(1)</sup>。いまやムスリムは隣人である。しかし、いまだに、アラビアイコール砂漠と石油、イスラームイコールエキゾシズム、野蛮、好戦的、一夫多妻というステレオタイプな見方も存在し、9.11以降のアメリカから発信された無定見なイスラーム敵視論によってそれは増幅されすらしている。

本論では、西欧、そして日本でアラブ・イスラーム理解の道具として使われてきた『アラビアンナイト』に焦点をあてる。そして、その解釈に込められた人種偏見、宗教偏見が、いかにチェックなしに日本社会に撒き散らされ、現在のイスラーム報道のあり方と増幅されて真のイスラームに対する理解を妨げているのかについて論じる。

## 1. 異文化を理解するとはどういうことであったのか

### 1-1 東洋史の系譜と植民地主義

ある人がA文化とB文化は「違う」と認識するでしょう。それは往々にしてA文化とB文化の優劣論にまで発展する。特に、帝国主義時代はそうであった。たとえば、明治以来、日本文化より西欧文化が優れていると感じた知識人はひたすら、西欧文化の研究と導入を図った。それは日本が、西欧がすでに持っているもの—近代的かつ先進的学術・技術、社会制度、合理的精神など—を欠落させているからであると考えたからであった。もちろんそれは、ネガとポジの関係で、日本文化は他のアジアの文化よりもその進化程度において凌駕しているという思考に裏打ちされていた。アジアが日本より遅れている理由は、日本がすでに西欧から学んで持っているものを欠落させているからであると考えたからである。

明治以来の日本国民形成を考えるにあたって、西欧にたいする劣等感とアジアに対する優越感をないませにした国民精神が醸成された。これが典型的にあらわれるのはあまりにも有名な福澤諭吉の「脱亜論」である。アジアが遅れている理由を学問的に立証し、またメディアがその遅れたイメージを増幅・拡散していくことは、実は日本がいかにアジアよりは優れているか、進化しているか、そして遅れたアジアの盟主になりうるか、ということをも自己満足的に賛美できるということだ。明治以降のいわゆる東洋学・支那学、そして大アジア主義・東亜新秩序・大東亜共栄圏の思想はこの系譜の中でその息を保ち、発展したといえる。

しかし、ここで問題が生じる。それは、「東洋＝アジア」の範囲とは、日本人にどのように認識されてきたのか、という問題である。明治以降、「東洋＝アジア」は西洋の反対概念として認識された。これは、西欧人の、欧米以外は全部アジアという観点を無批判に受け入れたということである。そうすると、日本で発達したいわゆる東洋学とは、日本人に優越感を与え、日本のアジア支配は正当化できることを傍証するために、西洋学の対となって存在したということにもなる。

例えば、東洋史を例にとってみよう。日本における戦前の東洋史研究のテーマでは、中華帝国交替史研究、北方遊牧民研究、東西交渉史などが主流であった。それから朝鮮研究、インド研究、最後が東南アジア研究、西アジア研究と研究の重要度が下がっていった。

中国（当時は支那）研究が盛んであり続けたのは、まず、江戸の漢学研究の伝統があったことと無縁ではない。漢学の素地をもった白鳥庫吉、桑原隲蔵、内藤湖南、佐伯好郎など日本人研究者の業績は当時の欧米学界でも注目されていた。かつて江戸の漢学者は中国を孔孟の国と讃え、儒教思想を会得・実現することに意を注いだ。しかし、明治以降、漢学の素養をもつ「支那学者」たちの研究は、「支那」を讃えるためになされたのではなかった。彼らの研究が実効性をもち、なおかつ精緻を極めたのは、「支那」が日本の隣にあって、たえず大陸進出をもくろむ日本国家の対外利権の対象であったからであったというの

が大きい。

たとえば、中華帝国交替史研究が盛んであったことは、結局万世一系の天皇制の優越性を炙り出す結果になったし、北方遊牧民研究は、「支那」文化にいかにも遊牧民の「野蛮」な要素が入り込んでいるか、または、「支那人」と北方遊牧民は別個の民族で、したがって、両者が統一国家を形成すべきでないこと、さらには日本の「満洲国」支配の正統性ということをも示唆した。

東西交渉史研究は、古今東西の文化の終着点としての正倉院御物に代表されるように、諸文化のエッセンスの「素晴らしさ」を取り込んで、世界に冠たる「ユニーク」なものとなった日本文化の優越性を想起させた。さらには漢語の汎用性と、当時流行であった科学的な偽装をまとった優生学的な人種論と社会進化論を逆手にとって、大アジア主義的野望を込めた「同文同種」言説を下から支えていたのも東洋学者たちの仕事であった。

しかし、こと東南アジア研究、インド研究、さらには西アジア研究となると手薄状態が長い間つづいた。理由はいくつかあった。まず、インド、マレーシア、中東はイギリスの、インドシナと一部中東はフランスの、フィリピンはスペインからアメリカの、東インドはオランダの、というふうに、この地域は19世紀から20世紀半ばにかけて、日本が開国し、産業殖産国家への道をひた走る中、すでに西欧諸国の植民地や勢力範囲であったということが挙げられる。当時の万国公法の世界秩序は、開化した文明国による後進地域の植民地経営は早いもの勝ちであることを保障したから、既に欧米の植民地になっていた地域に関して、日本は積極的に関与できなかった。当然、それら地域の研究もイギリス・フランス・オランダの研究の翻訳か焼き直しに過ぎなかった。

次に言葉の問題もあった。現地言語を日本人研究者たちがまともに勉強しなかったのだ。書き言葉が植民地政策によって整備されていないか、あるいは破壊されたこともあいまって、そのような被植民地の地域言語は、学ぶ価値があるものとも考えられていなかった。現地人には、日本人が学ぶべき何かがあるとは思われなかった。また、「他国の所有物」について研究しても、出世の道はない、という暗黙の了解が当時の知識人のサークルにはあった。東洋研究に必要であるとされたのは、漢文・モンゴル語以外には、英独仏露語のみという時代が長く続いた。

その様な学問的環境の中で、アラビア語を使ったアラビア研究・イスラーム研究が開始されるのは、昭和10年代の井筒俊彦や前嶋信次を待たなければならない。アラブ・イスラーム地域に関する本格的な研究は日本においてはまだ70年足らずの歴史しかない。

例外が、中国イスラーム研究である。大陸進出のための予備研究・調査の段階で、その存在が注目されたのは明治末から大正時代のことであった。黒龍会、浪人会などに属する国粋主義的大陸浪人たちが中国でムスリム（当時は「回民」、「回回」と呼ばれていた）に邂逅し、ムスリムの漢人との間の確執を見て、ムスリムの日本の大陸政策における利用を

考えたのがはじまりである。1922年には、清代のイスラーム思想家劉智の『天方至聖実録』が田中逸平によって翻訳された（出版されたのは、1941年、大日本回教協会からである）。1920年代前半には、佐久間貞次郎が上海でプロパガンダ雑誌『回光』を発行し、イスラーム勢力の中国からの分離を煽動している<sup>(2)</sup>。日本による「満洲国」建国後、1934年に全満洲のムスリムを組織するために設立された「満洲イスラム協会」の会長となった川村狂堂は、1920年代に中国でムスリムとなっている。「大東亜の精神を宣揚させ、民族協和を実現する」<sup>(3)</sup> というこの会の趣旨がものがたるように、日本のイスラーム研究は、日本の大陸における国策立案遂行の水先案内となり、露払いともなった。

とくに、1937年の盧溝橋事件、日中全面戦争開始以降は、イスラーム政策（対回工作）は、重要度を強め、日本陸軍による大陸におけるムスリム傀儡国家建設画策、日本軍占領地における傀儡組織設立へとつながっていく。特に、信仰をエスニシティの拠り所とする「回教徒」工作は、対ソ連・反共戦略の一環として重要視された。日本のイスラーム重視政策は1938年の東京代々木モスクの建設に対する軍のバックアップ、1939年の東京における回教圏研究所の創立、同年の東京、京都を巡回する「回教圏展覧会」開催<sup>(4)</sup>というさまざまな事実からも容易に知ることができる。しかし、中国のイスラーム研究は日本敗戦後ほとんど無視され、あらたな本格的研究が着手されるのは、1990年代半ばになってからである。

以上みたように、特に帝国主義時代の異文化研究のテーマは、学者が所属する国家の政治・外交・経済、さらには文化的対外戦略と密接な係りがある。そこには、客観的視点というはおのずから制限あるいは捨象されざるを得ない。

戦前日本では上に述べたような理由で本格的な中東地域研究、イスラーム研究にまで手が廻らない状況にあった。その代わり、一般向けにアラブ・イスラーム理解の一助とされていたのが、西欧語からの翻訳された『アラビアンナイト』（千夜一夜物語）であった。

## 1-2 西欧におけるオリエント、オリエント研究

西欧にはオリエンタル・スタディーズという学問体系がある。ロンドンの大英博物館のすぐ裏手、ラッセル・スクエアのロンドン大学には、School of African and Oriental Studies (SOAS) という学部、大学院がある。SOASは世界の「非キリスト教圏」にちらばったさまざまな宣教師の膨大な報告書や現地の書籍を蒐集、分析する場所として設立された。一言でいえば、異教徒をキリスト教化するためのノウハウが集積された場所であるといえる。そこには、異教徒は野蛮で遅れているからこそ、キリスト教化されることが原住民にとっての幸せであるという、19世紀から20世紀前半のキリスト教関係者の確信を示す資料が大量に保存されている。そして、SOASから徒歩5分の大英博物館には、もちろんキリスト教関係の文物も多く所蔵されているが、精力的になされたのは「文書」以外の異教徒による造形物の蒐集、分類、陳列、保管であった。すなわち、ロンドンのブルー

ムズベリー地区、ラッセル・スクエアー附近、半径800メートルぐらいの場所が、オリエント、すなわちキリスト教文明の「敵」を「知る」のための中心地だった。それは、エドワード・サイードがいう、「オリエント地方を政治・経済的に、宗教的に、文化的に支配するための学問」がなされ、集積され、陳列された場所だった。

サイードは、オリエンタリズムの定義として、「オリエント（東洋）とオクシデント（西洋）とされるものの中に設けられた存在論的・認識論的区別にもとづく思考様式と支配の様式」<sup>(5)</sup> であるという。すなわち、西と東は決定的に違う、その違いをありとあらゆる側面から証明するために、学問が総動員されたという。代表的なのが文化人類学、地理学、言語学、歴史学、文献学などだ。さらには、小説、詩歌、絵画、音楽などなどフィクションもその西と東の違いを浮きぼりにし、西による東の支配を正当化するために生み出され、消費されたと述べる<sup>(6)</sup>。オリエントなるイメージは、現地の実際がどうであれ、西欧社会で作り出され増殖した。そのイメージをサイードは、後進性、官能性、受動性、神秘性などであるという。

すなわち、オリエントとは、先進性、性的節度、能動性、合理性をもっているとの自負をもっていたヨーロッパとヨーロッパ人を映す魔法の鏡であり、自己満足・自己讃美のためにイメージされた創造物であるということだ。優越感を感じさせてくれる対象者がなければ自尊心を持ち得ない自己確立していない人間のように、オリエントなしに西欧は存立しえないこととなる。

さて、西欧人は、オリエントを、中東、インド、ときには、中国・日本までいっしょくたにしたイメージで認識した。近東 Near East はバルカン、トルコ、エジプトなど、旧オスマン帝国の範囲をさし、中東 Middle East はヨーロッパからみて中間の東の意味で、元来イラン、アフガニスタンなどさしたが、現在では、両者をいっしょにして中近東ということがおおい。狭義のオリエントは、中近東イスラーム世界と同義であった。西欧人が西欧社会をキリスト教社会と規定するならば、西を東とわける障壁はイスラームだった。18世紀、オリエントへのキリスト教布教はまだ本格的に行なわれていなかったが、十字軍遠征失敗以来のイスラーム嫌いはヨーロッパキリスト教社会に共通していた。それは、キリスト教とイスラームというよりは、むしろ、ヘレニズム文化と野蛮なオリエントの宗教というように、文化の差・宗教の差が、古代から超えることができない壁として存在していたように考える思考形式にも発展していった。それは、ギリシャ語文献がイスラーム世界でアラビア語に翻訳され、それが西欧語に翻訳されてルネサンスにつながったという歴史を完全に隠蔽忘却する思想と連動していた。

### 1-3 『アラビアンナイト』と西欧のオリエント理解

周知のとおりであるが、以下、西欧におけるアラビアンナイトの受容を概観してみよう。

フランスのオリエント学者アントワーヌ・ガランAntoine Galland (1646-1715) が15世紀のアラビア語写本を見出し、フランス語に訳し、*Mille et Une Nuit* (千と一夜) を刊行したのが西欧社会における『アラビアンナイト』の始まりである。その中にはシリア人ハンナからの話「アリババと四十人の盗賊」「アラジンと不思議なランプ」も含まれていたというが、ガランの創作であるという説は根強くあり、いまだに学界で決着がついていない。彼の訳業は大評判を呼び、英語、ドイツ語などに訳され、西欧社会のファンタジー小説の発展に大きな影響を与えたとも言われる。

『アラビアンナイト』は、アラブ・ペルシャ・インドのお話を集大成したものだった。ストーリーの面白さという点と、教育普及による識字率の上昇、さらには未知の地域への喚起された興味ということもあって、多くの訳がなされ、広く読まれた。ハビビト版(1825~43) マックノーテン版(1839~42)、レーン(1838~40)、ペイン(1882~84)、パートン(1885~88)(以上英訳)、ヘニング(1895~97)(独訳)、マルドリユス(1899~1904)(仏訳)などが続々と出された。

これもよく指摘されることであるが、『アラビアンナイト』には二つの読まれ方が存在する。一つは、子ども向き、もう一つは、おとな向きである。

『アラビアンナイト』が子どものためのお話としてヨーロッパで受容されたのは、ペロー(1697)、グリム(グリム童話第7版1857)などお話の集大成の出版という時代背景も考慮すべきであろう。子ども向け文学という文学ジャンルの出現は、出版文化の発達、国民形成のための識字教育の普及とともに、大人たちの帝国拡大の野望と大いに関係があると考えたほうが妥当であろう<sup>(7)</sup>。

1870年代イギリスで子ども向き文学を安価で提供したのがルートリッジ・シリッジ・トイブック・シリーズ(Routledge Shilling Toybooks)だった。1シリッジという安価な値段と美しい絵で大いに売れたという。このシリーズの中の一つ「アラジンと魔法のランプ」では、中国風アラジンと日本風のブードゥル姫が登場している。遠い東洋のどこかにあるファンタジーの場所に関して細かい考証は不要ということであろう。このシリーズが、「シンデレラ」、「ナースリー・ライムズ(マザーグースの歌)」、「聖書物語」、「長靴を履いた猫」、「ジャックと豆の木」、「眠れる森の美女」、「ロビンソン・クルーソー」、「イソップ寓話」、「美女と野獣」という、現在でも子ども向きの絵本シリーズに頻繁に登場する物語を収録していたことは興味ぶかい。

また、このシリーズには、他にも「アリババと四十人の盗賊」、「シンドバッドの冒険」が含まれている。いわゆる『アラビアンナイト』もの以外、すべて西欧の物語であることが指摘できよう。どの話もいずれも、想像力を育て、卓抜なストーリー構成をもった、奇想天外のファンタジーとして選定されたものと思われる。帝国の拡大に従って、日常生活を離れ、積極的に「未開人と野獣の跋扈する」海外に出ることを厭わない勇気と冒険心を

もち、恐れを知らず、なおかつ楽観的で啓蒙主義的人物の養成が意図されていたといえよう。それは、ハンナ・アーレントが、帝国主義の拡張の役割を担うものは、少年のような態度から一歩もでてはいけなかった、とかつて指摘したことと無関係ではなからう<sup>(8)</sup>。いずれにしても、イギリスのヴィクトリア朝時代に「世界児童文学」のパターンが固定化され、いわゆる「近代的自我」をもつ人物を育成したということもいえるだろう。

ちなみに、このパターンは、場所と時を変えて、戦前日本の尋常小学校の国定教科書における「ももたろう」にも援用されることになる。ももたろうは「勇氣」をもって「恐れを知らず」、「野蛮な鬼」を退治し、鬼の「宝物」を持ち帰ってくれた。戦場へ先頭を切って切り込み、戦利品を分捕る「勇敢な」魂の育成が何よりも尊ばれた時代のことである。

西欧におけるアラビアンナイトの大人向きの読まれ方もまた大人が先頭をきって遂行していた帝国主義の発達と切っても切り離せない。

産業革命をいち早く成功させたイギリスはヴィクトリア朝時代、世界商工業の覇権とそれを保障する制海権を握り、大英帝国を作り上げた。そのイギリスが中東の植民地支配に本格的に乗り出したのは1839年のことで、この年、イギリス東インド会社は武力によって現イエメンのアデンを占領した。さらには、67年バーレーン占領、69年にはスエズ運河占領、79年にキプロス占領、82年エジプト占領、1901年クウェート占領と続く。アデン占領から約60年の間に、特にイギリス社会においては、支配する対象の中東文化についての知識が求められるようになった。

一般的に、欧米では19世紀末、占領地についての基礎的学問が発達した。植民地学の一環として、言語学、宗教学、人類学、地理学、人口学などが重んじられた。中東地方におけるそれらの学問の基盤情報として現地につぎつぎに派遣された宣教師たちからのレポートが貴重であった。宣教師は、日々の説教の中で、イスラームに対するキリスト教、アラブ社会に対する西欧社会の優越を説く必要がある。彼らは自ら、アラビア語を学び、イスラーム研究をし、アラブの風習を観察しつづけた。植民地支配のためにも、布教のためにも、宗主国の学者たちがアラビア語研究・イスラーム研究、人類学的な研究をすることは必須であった。このようにしてアラビア語学・イスラーム学の基礎はこの時代に欧米で飛躍的に発展する。

しかし、すべての人が学者の書いたものを読むわけではない。アラブに関する簡便な知識を得るためには、一般の人々は異国情緒あふれた『アラビアンナイト』をより一層読みついだ。お話の面白さ、奇抜さは、より読者をしてその世界に耽溺させしめるからである。そこには、訳者の物語に対するスタンスを読者が知らず知らずのうちに身に付けさせられるという問題点をもはらんでいた。

たとえば、訳者バートンやペインは長くエジプトに生活しており、その分野の精通者と

して知られていた。しかし、長くアラブに住んだバートン自身でも、当時の西欧人が共通してもっていたオリエンタリズム的な偏見をアラブ人にもっていた。彼が「東洋人は無茶な夜ふかしを好む。砂漠のアラブ人はしばしば種族のことについて四方山の話をしながらか、明け方まで起きている。〈早寝早起〉というのは文明人の文句で、野蛮人または未開人の言葉ではない」<sup>(9)</sup>と述べ、同時代のアラブ人を野蛮人・未開人扱いしていることからそれは分かる。アラブ人の非合理、非効率的な生活習慣は、当時の西欧人のそれに比べれば、罵倒され、軽蔑されてしかるべきであるとバートンは考えていた。その一方で、「私の訳は、人類学者や東洋の風俗習慣の研究者たちに訴えるもの」と述べたように、その訳業は学問的権威という衣をもまとっていた。訳者たちのアラブ人に対する侮蔑的な眼差しを共有しつつも読者はアラブ・アラブ人なる「他者」を知るための知識として『アラビアンナイト』を読んだということになる。

アラブ人は、生活態度全体が野蛮で、すぐ人を処刑し、独裁者が跋扈し、ハーレムを形成し、どろぼうばかりで、性的に放縦であり、絢爛たる文化をつくり桁外れの豊かさと蕩尽はあまりにも理性を失わせ、摩訶不思議なことばかり起り、奴隷をもち、という『アラビアンナイト』の描く世界の強調は、健康を含めた自然現象に対する科学知識、法による秩序、一夫一婦制、奢侈の禁止・禁欲、理性、自由な市民による市民社会形成を旨とする近代西欧キリスト教社会の倫理概念とは対極にあった。すなわち、『アラビアンナイト』の世界をイスラーム世界とするならば、この物語にはイスラームに対するキリスト教の優越、西欧近代の優越、オリエントに対する西欧の優越が描写されていると、植民地主義の伸張により自信をつけた西欧の読者が読み取るであろう。

『アラビアンナイト』が描き出す世界はハールーン・アッラシードが登場することからもわかるように、アラブ、イラン、インドの中世であることは話の内容からもわかる。千年も前の話を現実の社会に投射し、理解するというのは常識人がすることではない。たとえば、『源氏物語』や『今昔物語』の英訳を読んで、外国人が現代日本をステレオタイプ的に理解するのは到底不可能であろう。しかし、西欧社会で、野蛮・神秘・不思議を描く『アラビアンナイト』が人口に膾炙したのは、アラブ・イスラーム社会が中世のままに停滞した社会、十字軍でキリスト教に出会っても改宗しなかった野蛮な社会であるとの西欧人の思い込みと決め付けがあったからともいえる<sup>(10)</sup>。

また、バートンらの訳業が人口に膾炙した19世紀末から20世紀初の時代は、世界宣教運動が華やかなころであった。特に、1910年のエジンバラ世界宣教会議は、キリスト教の対イスラーム布教の重要性を訴えるものとなった<sup>(11)</sup>。中東イスラーム社会に対して積極的にプロテスタント宣教師が出かけ、布教活動をした。彼らもまた帝国主義の申し子で、帝国主義者のまなざしを対象者のアラブ人とその宗教に向けていた。「イスラームは頑迷、暴力的、一夫多妻で好色、だから福音を伝えて改宗させなければ彼らは救済されえない」<sup>(12)</sup>、



に類する記述はこの地域で宣教活動をおこなった宣教師報告には多く見られるが、そのようなイスラーム観こそが、アラブを好奇の対象化し、文明国の下における被統治の蓋然性を『アラビアンナイト』の読者＝西欧人に実感させたとしたということがいえよう。

実際には19世紀末にはすでにアフガーニー、アブドゥッフ、リーダーらが中心となりイスラーム改革・復興運動がエジプトを中心としたアラブ世界に沸き起り、席捲していた。これは反帝国主義運動、反キリスト教運動、ナショナリズム運動、教育改革運動としてイスラーム世界全体で大きな力になりつつあった。それに対する警戒や論駁も統治者たる西欧列強側は用意していた。が、そのような生々しい現実には『アラビアンナイト』の読者にとっては無視されてしかるべきであった。彼らにとって、アラブ人の自発的運動はありえなかった。現実をあえて見ない、現実を見る努力は回避する、しかし、見たい幻想だけを見る、これがエンターティメントの世界であり、『アラビアンナイト』はアラブ・イスラーム世界をファンタジー化することによって、まさにこの願望に合致する枠組みを提供したということになる。

## 2. 日本語への翻訳とオリエント幻想

### 2-1 日本への紹介と子ども向き文学

明治以降、子ども向き文学は西欧語から続々と日本語に翻訳・翻案された。西欧社会で定着し、評価・受容されているものはすべて翻訳しつつ、そこに先進思想を見出し、日本の進むべき方向を見出す、というのが明治初期以来の西欧文学紹介の思想であった。しかし、当時日本に紹介された子ども向き文学の中で西欧にそのルーツを持たないものは『アラビアンナイト』ぐらいであろう。逆にいえば、「世界児童文学」というのは、西欧社会以外に存在しえない、という暗黙の了解が西欧文学紹介者の脳裏にはあったものと思われる。しかしながら、日本人が『アラビアンナイト』を翻訳出版するというのは、西欧人がイメージしたオリエント幻想（優越・偏見と憧れの感情）をそのまま無批判に受け入れるということを意味した。

『アラビアンナイト』の最初の翻訳は、タウンゼント版とレーン版からの永峰秀樹訳『開巻驚奇暴夜物語』（1875年）であるというのが定説である。その前書きには、「専ら欧州二行ナハレ、毎戸二蔵シ、每人読マザルハナク、読ム者、為ニ寝食ヲ忘ル」「人心ノ倫常自カラ備ハリタル、善悪必ズ其応報アルガ如キ、亦以テ勸懲ノ具トナシ、兼テ世態人情ヲ知悉スル料トスルニ足レリ」<sup>(13)</sup>とある。「エンターティメント性」とともに、「倫理・因果応報・勸善懲悪・社会と人間性」、すなわち、近代国民国家の中で望まれる社会的規範と人間像が描かれているとする。これは、タウンゼント版の前言にあることで永峰の発案ではないようであるが、この永峰による訳業は、『アラビアンナイト』の子ども向けの本としてのイギリスにおける役割をそのまま近代国家として出発したばかりの日本社会に移

植しようという意図がみえる。タウンゼント版は子ども向きであったため、この訳業には性的な表現を含む話は当然のことながら含まれていない。子ども向き文学としての本格的な紹介は、大正時代による日夏耿之介『壺阡壺夜譚』（レーン版）（世界童話大系 1925年）がその嚆矢といえる。

## 2-2 落谷虹児の『アラビアンナイト』とアラビア幻想

大正12年の『少女倶楽部』に掲載された、加藤まさをの「月の砂漠」は、現在に至るまで歌い継がれている歌であるが、砂漠をしらぬ民である日本人にとって、砂漠とは、想像力を駆り立てられる場所であった。そのような日本におけるロマンチック、幻想のアラビアイメージを決定したと思われるのが当時の人気挿絵画家、落谷虹児の画業であろう。虹児はこの歌をイメージした絵を描いている。（図1）

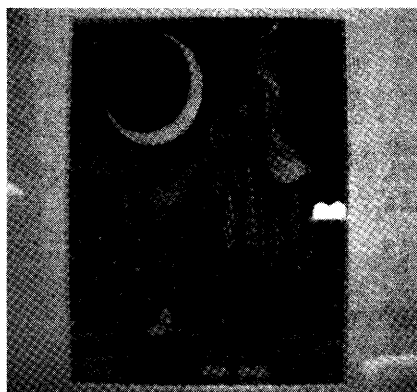


図1

満天の星とイスラームの象徴としての三日月の下に、水煙草をもったアラビア装束の王子がラクダに乗って旅をしている。ラクダの首には金の鈴、向こうに見えるのはモスクのドーム。虹児のフランス留学中にフランスで流布していたであろうエキゾチックなアラビアイメージをさらに純化したものであろう。

さらにそれにつづく、世界名作童話全集 講談社『船乗りシンドバッド』（解説 久米

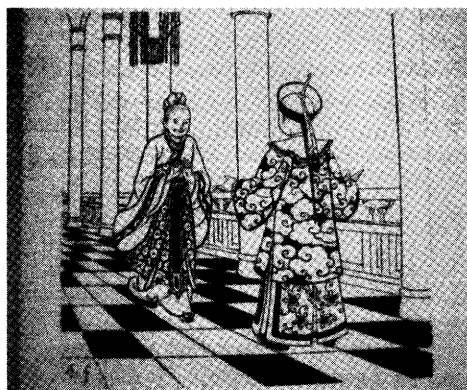


図2

元一1941年）の画業は、絢爛豪華、ロマンチック、異国叙情あふれる、清冽な虹児ファンタジーワールドの真骨頂をなしている。

新発田市の落谷虹児記念館には、この本のための原画が残されているが、そのいくつかを示してみよう。

図2は、「アラジンと魔法のランプ」の一場面を描いたものである。中国風の宮殿（故宮？）にアラジンの辮髪と母親の纏足が、舞台が中国であることを象徴的に描いている。辮髪は清代の風俗である。落谷虹児は、「むかし」の中国のイメージをあまり遠くない清代に投射させた。もちろん、「アラジン」は、版によって舞台が中国であるものとアラビアであるものがあるが、訳者が中国のものを選択したため、必然的にこのような絵となっている。黒と白のコントラストと、アールデコ調の美しい衣装と廊下の文様、遠近法が虹児らしい表現



図3

だ。しかし、まったく中国らしさを感じさせない絵である。

図3は、皇帝（王様？）にブドゥール姫を嫁にもらいたいとかしづくアラジンと母親であるが、ここにも、辮髪、服装、橋、龍、鼎など中国風の意匠が凝らしてある。しかし、人物の表情が乏しいのとあいまってなにか平坦な図でまったくリアリティーを感じさせない。

アラジンという名前はムスリムの名前前で、中国のムスリムにもそのようなイスラーム名を持っているものがあるが、虹児の描くアラジンが全く中国のムスリムらしくないというのも、彼が中国のムスリムの実態を全く知らないで描いたからであろう。

当時、日中戦争（「支那事変」と呼ばれた）は膠着状態であった。日清戦争勝利後、日本においては「支那＝衰退、卑怯、怠け者、生意気、弱者」というマイナスイメージが定着していた。それを「膺懲する」というのが大義名分なき日中戦争の唯一の遂行理由であったが、その一方で、日本文化の源泉の一つという観点から、過去の中国文化に対する憧れは強かった。しかし、現実の交戦相手である中国を表現することは、なまなましい現実を投影することにつながる。中国を対象としながらも、今はどこにもないところを描く、それが虹児のファンタジーであり、隠された狙いであった。それは、畢竟、若い読者をして現実に目を背けさせしめることにつながった。しかし、当時流行の「支那侮蔑観」をおおるような講談や絵画よりは、よほど平和的であったということがいえよう。

図4が、「アリババと四十人の盗賊」の口絵である。賢い女奴隷マルジャーナが壺にひそんだ盗賊どもを油で焼き殺す、というなんとも残虐な場面であるが、「月の砂漠」と同様の三日月と満天の星、アラベスク模様の門、さらには、あまり感情のこもらない美しい女奴隷の表情によって、読者はこの場面に感情移入することなく、面白い話のための美しいさし絵として楽しむことができるしかけとなっている。

ここには、西欧人がイメージした幻想のアラビアの影響を認めることができるが、エロチックなイメージ、遅れたオリエントというイメージはない。日本はアラブ・イスラーム世界を支配せず、日本人で中東を訪れたことのある人は些少であり（にわかムスリムであった山岡光太郎のメッカ巡礼は1909年）、ましてや偏見はなく、幻想は幻想のままで、まさに「娯楽」としての受容される素

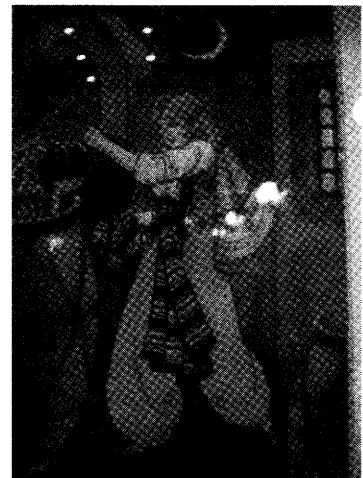


図4



図5

地があったし、落谷自身がそれに迎合したということであろう。アラビアは日本人にとってあまりにも生々しさに欠けていた。

図5は、戦後、川端康成の翻案で出版された講談社の絵本ゴールデンシリーズ（1958年）の表紙である。おなじく落谷によって描かれている。

アラジンは、今度はアラブ人として登場している。戦後、アラブ諸国が独立し、日本も石油をこの地域からの輸入におおく依存しはじめた時期の作品であるにもかかわらず、戦前の幻想の「アリババ」路線を忠実に踏襲した画業であるということが指摘できよう。一旦確立したオリエント幻想は、なかなか変更されず、挿絵画家と子どもたちの心を支配し続けたということ物語っている。

ちなみに、この講談社のゴールデンシリーズで川端康成が唯一解説とリライトを行なっているのがこの「ふしぎなランプ」である。彼は次のようにいう。

アラビアンナイトのなかでも、このアラジンとふしぎなランプの物語は、巧みな構成をもち、ドラマチックでもある。ゆびわの魔神が、人を運ぶ力しかないというもおもしろい。アラビアンナイトには、あまりにも内容が複雑すぎて、肝心の主願が見失われがちなものが多い。この物語は、幼いものたちにあたえる、メルヘンの代表ともいえる。

面白いストーリーと「幼いものたちに与えるメルヘン」という言葉は、まさに、明治以来輸入されつづけた西欧近代子ども向き文学の思想によっているといえよう。

### 3. バートン版翻訳、日本社会とイスラームへの偏見

#### 3-1 戦前-戦争直後のバートン版と日本社会

子ども向きのそれと対照的なのが、大人向きと形容されるバートンによる訳業である。特に、バートン版は英語から日本語への訳業がされる前からその性描写の存在が話題になった。芥川龍之介は大正13年（1924年）に「書物往来」「リチャード・バートン訳「千夜一夜物語」に就いて」という文章で、「下がかったことも原文が無邪気に堂々といい放っているのをそのまま訳出してあるから、近代文学にあるラブ・シーンよりも、猥褻の感を与えない」と述べていることから、その注目度、期待度が分かる。興味深いのは、性描写への強い関心に対して、子ども向き『アラビアンナイト』の物語性、ファンタジー性を芥川がこの文章では取り上げていないことであろう。バートン版『アラビアンナイト』は、

以降芥川のこの期待に添う線で日本で翻訳出版されることになる。

数年して出されたのが、大宅壮一他訳『千夜一夜』（中央公論社）（1929～31年）であるが、当然良俗に反するというので当局の検閲が入り、伏字だらけでの出版となった。これがなくなるのは、齋藤三夫訳『アラビア千一夜物語』東西出版社、（1948～49年）、大場正史『千夜一夜物語』思索社、（1949～50年）の相次ぐ出版を待たなければならない。特に、後者は、バートン版のオリジナル挿絵を用いているのが注目される。性的な場面を忠実に描写した絵を日本版に転用することによって、「好色なアラブ人」イメージを日本に定着させることに貢献したものとされる。



図6  
荷担ぎ屋と三人の娘の物語挿絵  
大場正史『千夜一夜物語』思索社版

### 3-2 高度成長期のアラビアイメージとバートン版

さて、この好色イメージは例えば境田昭造という漫画家による「漫画・世界五大宗教の内

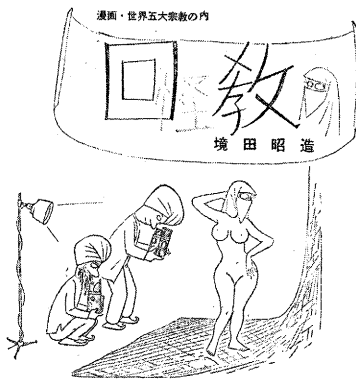


図7-1 アラビアン・ヌード

うだが）が古臭い二眼レフで写真撮影をしている「アラビアン・ヌード」という絵。頭隠して尻かくさず、実は好色というようなナンセンスさがアラブ社会とアラブ女性にあるというイメージを見るものに植え付ける。

第二枚目が、最新のカメラをぶら下げたアラブへの日本人旅行者が、アラビア風病院で指先に包帯をまいてもらったのはいいが、（魔法で？）包帯とともに指が横についてしまったという「ほうた

内」という『文藝春秋漫画読本』（1957年11月）の漫画「回教/怪教」という漫画にも表れる。この漫画読本は、当時、サラリーマン向けの気の置けない雑誌として出されており、性的好奇心を喚起するような記事、コント、小説、漫画が満載されていた。内容は当時の平均的日本人男性の女性観・異文化観を具現化していると思われる（図7「回教/怪教」）。

さて、第一枚目が、頭をヴェールで覆っているのに一糸まとわぬ形でポーズをとっている女性を二人のアラブ人男性（どうみてもシーク教徒のよ



図7-2 ほうたい

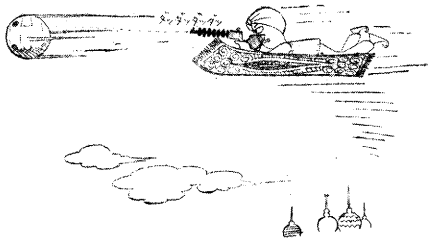


図7-3 神を恐れぬ者よ！

の摂理にかなっているが、人工衛星は神の意思に背くという、アラブ人の、そしてパレスチナ戦士の「頑迷さと迷信深さ」を揶揄しているものと思われる。

第四枚目が、伸びて地上に横たわっているアリババらしき男を一人の男がチャルメラを吹いて起そうとしているのだが、それを眼だけを残して全身ヴェールに包まれている四十人の女房たちが固唾を飲んで見守っているという「アリババと四十人の女房」。並み居る女房たちの視線がチャルメラ男に注がれており、アリババが起き上がらなければ、この男の妻になろうとしているということを暗示している。男にとっては嬉しいような悲しいような、というところが落ちであろう。

この特集のうち、宗教として取り上げられているのは、キリスト教、仏教、イスラーム教（回教）、儒教、無宗教の五つである。性的な揶揄がはいっているのは、「回教」のみである。「回教」に関して、ターバンの巻き方や蛇使いなど、インドの風習をアラビアと誤認していることはご愛敬として、やはり問題とされるべきは、イスラーム＝アラブのイメージが、「好色、一夫多妻、男の天国としてのハーレム、乱暴、頑迷、無謀、時代遅れ、神秘、幻想」といった西欧のオリエンタリズムを裏打ちしたものであるということだ。「回教/怪教」ともじったところにそれが如実に表れる。特に、二枚目に日本人が描かれており、戦前とは違ってアラブと日本の経済交流を連想させるが、これらのマイナスイメージは戦前と比べて変化がないか、あるいはかえって悪化していることに留意せねばならない。

さらに、これら幻想と好色のアラビアイメージに拍車をかけたのが、大場正史『千夜一夜物語』（河出書房新社、1966～1967年）であり、当時、120万部の大ベストセラーとなった。大場はこのヒットにより、性風俗についての蘊蓄をさまざまなメディアに発表することとなり、まるでバートンの趣味が乗り移ったかのように、アラビアンナイト研究者のみならず性風俗研究者として名を馳せた。

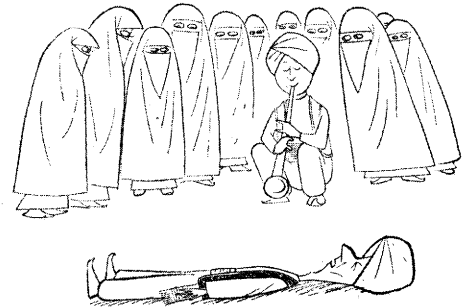


図7-4 アリババと四十人の女房

さて、以上の好色と幻想のアラビア＝イスラームイメージが戦後日本社会を席捲した背景を考えてみよう。

まず挙げられるのが、1) 高度成長期における言論の自由・表現の自由、特に性表現の自由とメディアによる大量流布、大量消費、2) 男女性役割分担論の高まり（たとえば、女子大生亡国論など）、3) 赤線廃止（1956年）に伴う赤線復活論とトルコ風呂の営業開始時期といった性産業復興期、4) 円持ち出し制限があったことで、自由に海外旅行ができない時代であること、5) 日本におけるムスリムが少なく、専門家も少なく、一般のイスラーム知識が寡少のころであること、6) 石油の輸入元としてのアラビアへの急激な注目、などがあげられよう。すなわち、新憲法発布後も戦前と変らぬ男性中心主義社会の中で、性の商品化にともなう性産業・性的言論の隆盛と、ムスリムという当事者がいない場面での面白おかしい異文化の細切れの導入と消費、さらにはアラブ＝アブラの国への興味とが、偏見にみちたアラブ観・イスラーム観を形成したといえることができる。特に、いわゆる特殊浴場に「トルコ風呂」というハンマームやハーレムを連想するような名称が使われたことは、アラビアンナイトからくる好色イメージに端を発しているものと思われる。ムスリムが社会にほとんどいない状況においては、好色のイメージは、絶対的遠方において反論できない他者に押し付けられるほうがよく、それによって身近なものをだれも傷つけないという点において安心であった。

板垣雄三は、日本は中東の植民地統治をしていないから中東政治に関しては無謬であり、文明間対話の仲介者となれる、と主張するが<sup>(14)</sup>、話はそんなに単純でナイーブなものではない。日本ではバートン版の西欧の偏見にみちたオリエンタリズムの、帝国主義者の眼を通して「男も女も好色な中東イスラーム社会」イメージを植え付けられてしまったからだ。キャバレー、ポルノ産業、最近ではポルノサイトにおける「アラビアンナイト」「アリババ」「アラジン」などと銘打たれたネーミングをみれば、アラブ・イスラーム世界に対して無実であると言い切るのには不遜であろう。さらには、2004年の9月から12月に国立民族学博物館で開かれた特別展「アラビアンナイト大博物展」でも、オリエンタリズムの観点は提示されるだけで、批判の対象とはされず、エロチックな表象もみるものの判断に委ねられる展示となっていた<sup>(15)</sup>。準備企画の時期がアフガニスタン戦争・イラク戦争の時期と重なっていたことを考えれば、この企画こそがオリエンタリズムそのもの、アラブ・イスラームの新たな他者化作業そのものでなかったのかとも疑いたくなる。

#### 4. まとめにかえて——現代のイスラーム報道と『アラビアンナイト』の負の遺産

9.11事件以来、あまたのアメリカ発の報道が、イスラームとテロリストを結びつける発言をし続けている。それは以下のような言い方だ。「すべてのムスリムがテロリストというわけではない。しかし、ほとんどのテロリストはムスリムだ」と。イスラームは破壊的、

残忍、野蛮で、女性の地位が低く、民主主義が遅れていて、欧米が支援しないと救いようがない、というのが、2004年6月に打ち出されたアメリカ主導の「中東民主化」計画、大中東計画の思想だ。もちろん、それらの対イスラーム誹謗中傷言説が、アメリカの中東石油支配構想と表裏一体となっていることはよく知られているが。

2004年4月末に明らかになった、アブ・グレイブ刑務所虐待事件は一連のイラク関係報道の中で、性的虐待を明らかにしたという点で、全世界に大きな衝撃を与えた。シーモア・M・ハーシュは、この虐待事件の背景にネオコンの教科書といわれる、アメリカ人オリエンタリスト、ラファエル・パタイ『アラブの心』（1973年）の記述が関連しているという<sup>16)</sup>。「アラブ人は力のみを信じる」「アラブ人最大の弱点は（性的）恥と屈辱」というパタイの確信は、単純かつ前近代的家父長制社会にどっぷりと生きる「無知な」アラブ人観に下支えられた。そしてアメリカの中東政策決定者の偏見にみちたアラブ観とも一致したからこそ、性的虐待が最も効果的威嚇行為として採用されたのであろう。

しかし、筆者はこの虐待の場面が、アラビアンナイトの舞台であるバグダード郊外であることも考慮しなければならないと考える。性的虐待を命令とはいえ、楽しげに悪ふざけのように行っていた看守・兵士たちの日常の延長線上に、雑誌、インターネットで一日平均40枚もあられもないポルノ写真を見る若年アメリカ人という現実がある。そして、そこには、好色で性的に乱れたアラブ人、というステレオタイプ的なアラブ蔑視観が入りこんでいるらしいことは、あまたの欧米ポルノサイトがアラビアンナイト的な名称を持っていることからわかっていこう。バグダードが「好色さ」と連想された時点で、この事件当事者たちは人間の尊厳と理性に対する罪の意識についての自浄能力を失ってしまった。これこそが、植民地主義的文化意識形成における「他者化」作用であった。

かつて、大英帝国の時代、アラブ・イスラームに関する知識を一般イギリス人は『アラビアンナイト』から得ていたとするならば、今のアメリカと日本を含めた周辺の世界の国民は、アラブ・イスラームに関する知識の多くをアメリカ発の中東報道から得ている。

100年前の帝国主義の時代、それでも宣教師、あるいはエージェントという形でアラビア語を解し、イスラームを理解する専門家は西欧社会にはあまたいた。しかし、いま、ホワイトハウスの政策決定の場に、アラビア語を解し、アラブ人の気持ちを理解できるアラブ事情に通じた「アラビスト」（アラブ研究家、親アラブ派）はいないという。イスラエルを脅すものであるという論理である。13万人いるイラク駐屯部隊でアラビア語がわかるものはほとんどいない。かわって、戦略論に秀でた人材ばかりが、中東政策を左右している。

メディアはいま、アメリカの中東支配を支える大資本による寡占状態にあり、中東の悲惨な現実にはテレビ報道されない仕掛けとなっている。また、ハリウッド映画では、冷戦時代の悪役はロシアのコミュニストと相場が決まっていたが、90年代以降は



とんどアラブの「テロリスト」になっている。100年前の帝国主義時代よりも情報の正確さの危うさ、事実の歪曲という点において、事態は深刻ということであろう。100年前、一般的には『アラビアンナイト』だけの情報であったのが、現在は、それが数万倍の、それも実映像などより「正確さ」と「リアリティー」を装った圧倒的情報量で増幅されているからだ。ただ、膨大な情報の根本部分が、『アラビアンナイト』解釈に表れるオリエンタリズムであるとすれば、歴史は繰り返すという以上の不気味さと、悪意を感じさせる。そしてそれを無批判に受け入れている日本のメディアと文化状況もまた、明治時代の永峰秀樹による翻訳がなされた時となにも変わらない情報閉塞状況にあるといえよう。アラブ側からすれば、オリエンタリストとの謗りを免れないであろう。

現実には、9.11以降の日本の高校生への大規模なアンケート調査で、三浦徹は、イスラームのイメージとして、遅れている（53%）、狭義が厳しい（54%）、寛容さが無い（59%）、奇妙な習慣（72%）、自由がない（70%）、攻撃的（75%）、神秘的（69%）とネガティブなイメージが高校生に定着しており、また、イスラームは平和な宗教であると答えた生徒は1800人中30人あまりしかいないという驚くべき数値を挙げている<sup>(17)</sup>。イスラームの本来の意味は「平和」であるのにである。これらのネガティブなイメージこそ、アラビアンナイトをはじめとしたオリエンタリスト的西欧発の言説が撒き散らし続けているものである。「テロリスト」というイスラームのほんの一握りの過激分子をイスラームそのものであると日本の高校生が認識しているということの責任は、高校教師というよりは、むしろアメリカ発の報道をたれ流すマスコミに問われるべきものであろう。

『アラビアンナイト』はこれからもおとぎ話として、生きつづけるだろうが、それは、人間の想像力の素晴らしさについてであり、アラブの特性、イスラーム蔑視論として生きつづけさせるわけにはいかない。もうそろそろ、欧米経由でないアラブの、ムスリムの人々の肉声を聞き分ける能力をつけてもいい頃であろう。「アルジャジーラ」、「エレクトリック・インティファダ」など、アラブのメディアの紹介をして、欧米のそれと比較をし、真偽を自ら確かめる能力をつけるとともに、身のまわりのムスリムとの心の交流が何よりも必要とされる時代となっている。

## 註

- (1) Kojima, Hiroshi. "Demographic Analysis of Muslims in Japan". *Conference Paper of the 13<sup>th</sup> KAMES & the 5<sup>th</sup> AFMA International Symposium*, Oct. 15-17, 2004, pp.184-189.
- (2) 拙稿「国際都市上海伊斯蘭復興の一個側面」、発行委員会編『中日関係多維透視 古厩忠夫教授還暦記念論集』香港社会科学出版社、2002年。
- (3) 拙稿「満洲回教協会」『岩波イスラーム事典』岩波書店、2002年
- (4) 外交資料館、レファレンスコード：B04012294800、アジア歴史資料センター所蔵資料。
- (5) エドワード・サイード（板垣監訳）『オリエンタリズム』平凡社文庫、1993年 p.20。

- (6) Ibid., p.40.
- (7) 西尾哲夫『図説 アラビアンナイト』河出書房新社、2004年、pp.17-25。
- (8) Cited in K.De Ridder "Congo in Gansu (1898-1906)", K.De Ridder ed., *Footsteps in Deserted Valleys—Missionary Cases, Strategies and Practice in Qing China*, Leuven University Press, 2000, p.151
- (9) 「ジョバイル・ビン・ウマイルとズル姫の恋」脚注 大場正史訳『千夜一夜物語：バートン版』河出書房新社、1967年、3巻、p.342。
- (10) Daniel, Norman. *Islam and the West—the Making of an Image*, Oxford: One World, 1960, pp.296-301.
- (11) *Report of Commission I* (1910), World Missionary Conference in Edinburgh 1910, p.13.
- (12) たとえば、アラビヤミッションの宣教師として、のちにはイスラーム布教の専門家として名を馳せ、プリンストン大学神学部教授までつとめたサミュエル・ツエマーは、「十字架、十字架だけがムスリムのプライドと自己正当化を打ち砕き、すべての偽善と自己欺瞞を解消する」と述べる。(Zwemer, Samuel. *Islam and the Cross* (1939) Reprint : P&R publications, Phillipsburg, p.53, 2002).
- (13) 「暴夜物語」『明治文化全集』第13巻、日本評論社、1993年、p.363。
- (14) 板垣雄三「私の視点」『朝日新聞』2001年9月20日。
- (15) 国立民族学博物館編『アラビアンナイト博物館』東方出版、2004年。特に、pp.116-117を参照。
- (16) シーモア・M・ハーシュ「告発——イラク収容所における虐待の実体」『世界』2004年7月号。
- (17) Miura, Toru. "Perceptions of Islam and Muslims in Japanese Schools: Questionnaire Survey and Textbooks". *Conference Paper of the 13th KAMES & the 5th AFMA International Symposium*, Oct. 15-17, 2004, pp.195-196.

本論は平成16年度～19年度日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究(c)(2)「近現代中国における欧米キリスト教宣教師の対ムスリム布教に関する歴史社会学的研究」(課題番号16520429, 研究代表者 松本ますみ) の一部である。